

ムを

ズムを

ムを

~~ム~~

ムを

ム ムを

ムを

ムを

ム

が妥当する事例あ妥も事の、一般化にる事は検討べるき課題こ妥も事があきらになっいらいる。

△注4)

4点を指摘している。

1

生産効

末端処理技術を取り付けるよりも設備全体を更新した方が、
も下がる場合通る常である。

40の4認

ムを

△ムを

章 燃料電池開発状況と問題点

1

年)

1. 輸・民主部門における二酸化炭素の排出抑制寄与。二
2. 燃料供給源の多様化によりエネルギー安全保証に資する。
3. 産業競争力強化、新規産業・雇用創出が期
燃料電池と水素エネルギー利用技術は、現在の産業 、エネルギー

る根幹からの変更を迫る可能性のある技術である。その可能性として次の2を具体的にあげている。

1. 料電池自動車50万台が導入されれば、その発電容量は、わ
国の電気事業者発電設備と自家発電設備と電べて合計した 設
容量 (20年度末、06kW) を凌ぐものとなる。
2. マーケット規模は、関連産業まで含めると2020年頃までの累積
10

そして燃 燃 て 燃
として次の見通を提示して次。と

- 1 国の自動車メーカー、カ定置用はカ、カ2033~43年市自場投入
目指し、開発加目、お 開
音を明確に感じることができた。
2. 2005年頃までの開発競争の結果が、市場における競争

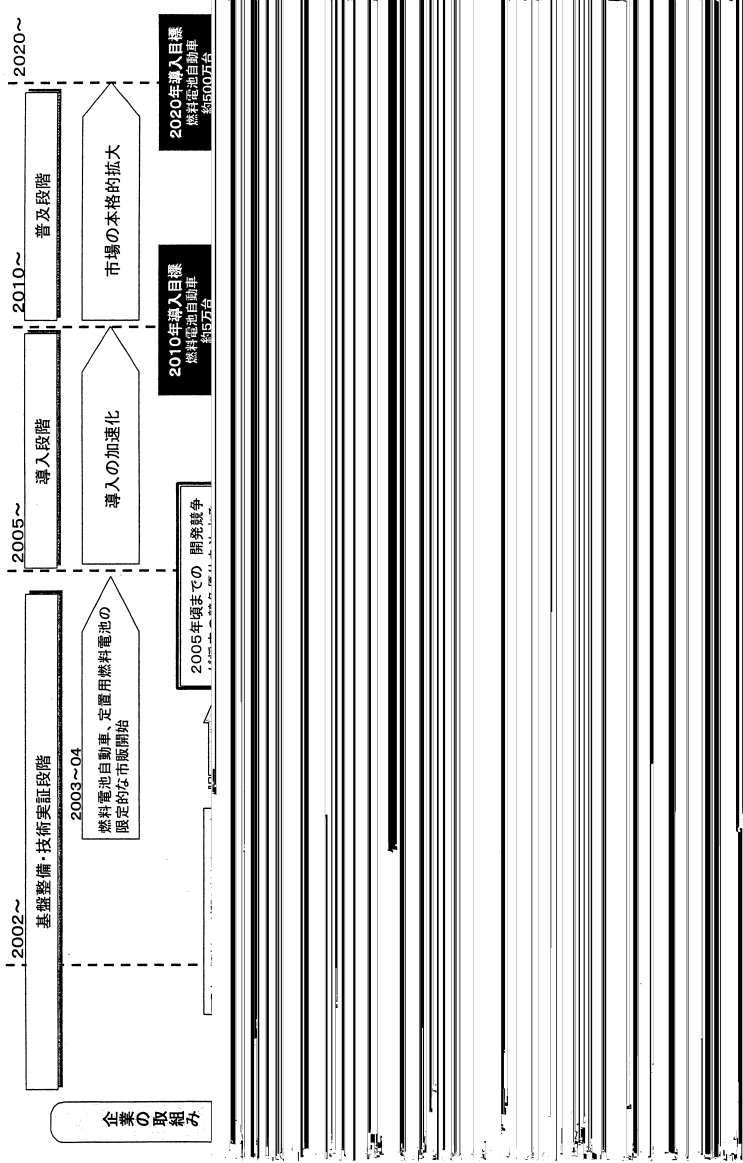
以上の を の
定置用燃料電池1000万kWの前倒し達成 (第1図参照) する決意で取り組む
べきとして燃料電池の実用化・普及を加速されるため、今後、拡充・強化
すべき施策を提言している。

2 燃料電池プロジェクトチームの提言

次に上記の基本認識を前提にしたプロジェクトチームの具体的 に
て検討する。内容は、以下のようなものであ。内

第1図 固体高分子形燃料電池/水素エネルギーの

オ



出所：燃料電池プロジェクトチーム報告書

1 戦略的技術開発の推進

き、産学官の適切な役割分担の下、戦略的に技術開発を推進する。特に、水

- 水素安全技術の確立、圧縮機等の国

2 実証試

(燃料電池自動車)

本年度から実施の水素供給ステーションの実証を含む大規模公道走行
験に加え、以下のような事業を推進すべき。

- バ〇ス等による実証試験
- 水〇素供給ステーションの増設、段階的整備
 - 安全性の確保を前提に試験走行のための大臣認定手続の柔軟運用
 - 2005年目途に自

(定置用燃料電池)

- バイオマス

の実証試験に加え、にの

- バイオマスから取り出したメタンガス利用燃料電池の更な

普及啓発の推進

!

○ バイオマスから取り出したメタ

○ バイオマスから取り出したメタンが取利用燃料電

○ バイオマスから取り出したメタンが利オ用燃料電

○

バ■

○ バイオマスからバ取り出したメタンが利

○

バ○

○ バイオマス

言えば、その実用化を早く実現するためにも、共同できる技術分野がある程度限定しても推進する必要がある

第2

(5

水

- バイオマスから取り出したメタンガ利用燃糖な
- バイオマスから取り出したメタンガオ利

p.168.

Porter, M. E. and C. van der Lind (1995), "oward More Competitive and Environmentally-Responsible Relationships", *Journal of Economic Perspectives*, Vol.9, pp.97-118

- (2) 松岡俊二「
店、2002年.
- (3) Palmer, K., W.E. Oates and P. R. Portney (1995), "Why are Environmental Standards: The Benefit-Cost or No-Cost Paradigm?", *Journal of Economic Perspectives*, Vol. 9, pp. 119-132.
 浜本光紹「ポーター仮説をめぐる論議」『環境と産業』岩波書店、1997年、第160巻第5・6号。
 浜本光紹「環境規制と産業の生産性」『経済論叢』京都大学、1998年、第162巻第3号。
- (4) 吉田文和「環境と科学・技術」『環境保全への政策統合』寺西俊一・細田衛士編、岩波書店、2003年。
- (5) 日本経済新聞、2003 日